

調査報告

障がい者スポーツイベントのマーケティング —大分国際車いすマラソンのマネジメント事例—

Marketing of the Sports Event for the Disabled
:Management of the Oita International Wheelchair Marathon

松本 耕二 (山口県立大学社会福祉学部)
Koji MATSUMOTO

1. はじめに

今日、スポーツへの参与は、自分自身がカラダを動かし楽しむ「するスポーツ」、臨場感あふれる競技場やイベント会場で観戦し応援を楽しむ「みるスポーツ」、さらにはイベント自体を直接的、間接的に支援する「ささええるスポーツ」などと多様化し、多くの人々がスポーツのもつさまざまな魅力に触れることができるようになった。このようなスポーツ参与形態の多様化の背景には、地域の運動会からサッカーワールドカップまで数多くのスポーツイベントの開催と、その表裏一体となった営みのノウハウが構築されてきた経緯があるといえる。

本稿では、未だ競技人口やスポーツ参加率が低いとされる障がい者のスポーツイベントに着目し、そのイベントのマネジメントの実際について明らかにすることとした。今回は世界に先駆け、27回の開催実績を誇る車いすスポーツイベント、大分国際車いすマラソン大会のマーケティング手法、殊にイベントマネジメント（組織、プログラム、広報、メディア、活性化策、人材養成）戦略について、大会関連資料収集とともに大会実行委員会へのヒアリング（直接インタビュー）と現地フィールドワーク（直接観察）を行ったので報告したい。

2. 大会の概要と変遷

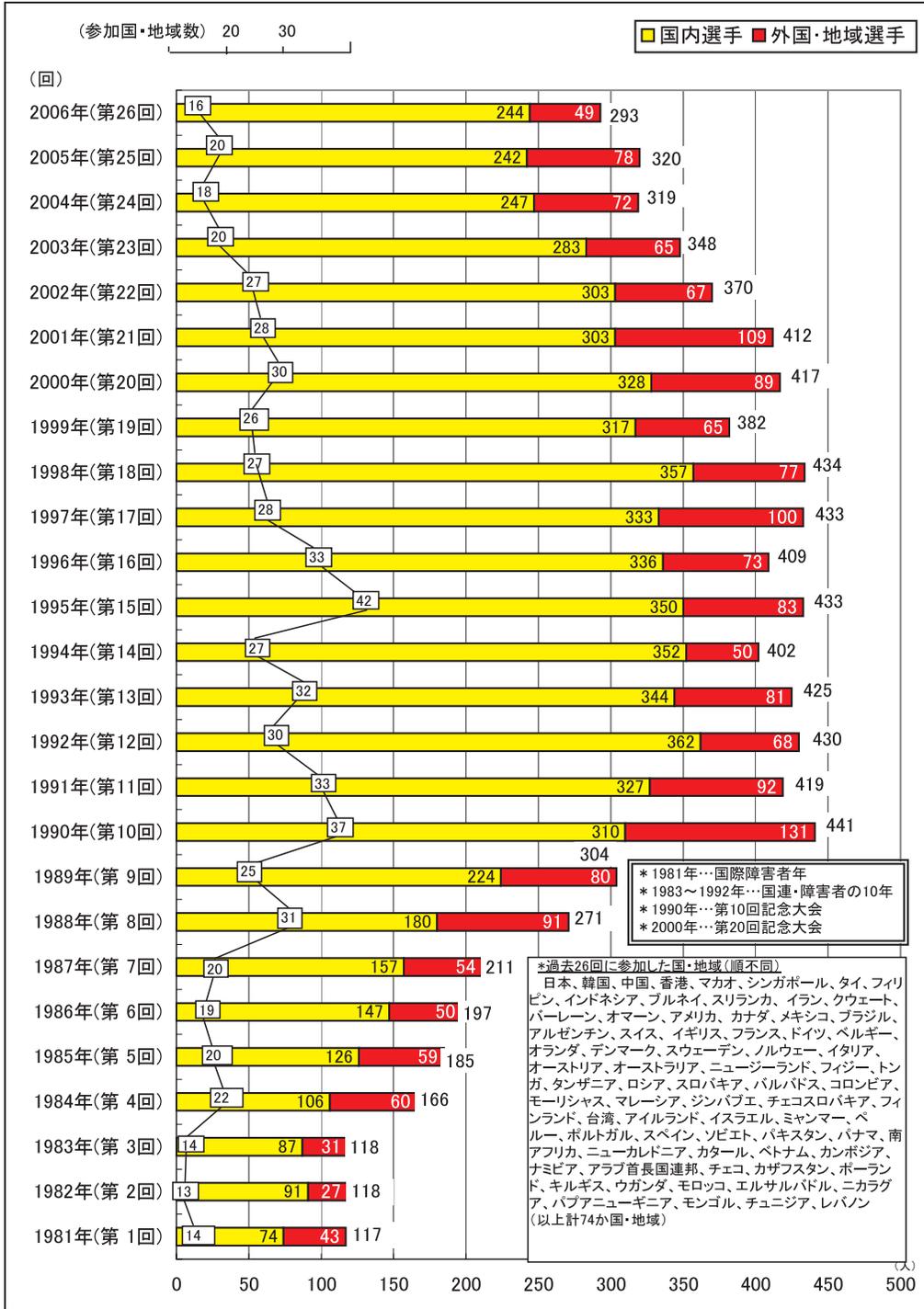
(1) 大会概要と第27回（2007）大会

大分県は国際障害者年（1981）の記念行事に「日本人に親しまれ、障がい者の逞しさが表現でき、ふれあいと継続性のあるイベント」を企画する中で、パラリンピック*の創始者ロードウィッチ・グットマンに直接教えを受けた大分の医師故中村裕博士の尽力により本大会が誕生している。1981年11月1日、世界14ヶ国、117名の選手が参加し、世界で初めての「車いす」のみの国際大会が開催された第1回大会から数えて74以上の国と地域から8,600名を越える車いすのマラソンランナーが大分の街を疾走したことになる。

2007年の第27回大分国際車いすマラソン大会にはフルマラソン113名、ハーフマラソン169名の282名がエントリー（海外からは15か国、48名がエントリー）し、コース沿道には多くの観客が選手に声援を送った。フルマラソン42.195kmを男子（T53/54クラス）1時間23分22秒で優勝。時速30km平均のスピードである。

この車いすマラソン単独の国際大会は、障がい者の社会参加のみならず、障がい者自身がスポーツを楽しむための環境づくりを推進させ、世界に先駆けた四半世紀にわたる大会実績のなかで、国内外の障がい者へむけて多くの感動と理解、そし

* パラリンピック：国際パラリンピック委員会（International Paralympic Committee, 略称IPC）が主催する身体障害者を対象とした世界最高峰のスポーツ競技大会。戦争で負傷した兵士たちのリハビリとして「手術よりスポーツを」の理念で1960年に第1回大会がローマで開催された。



*前回までの参加延べ人数[国内選手 6,530人 / 外国・地域選手 1,844人 = 合計 8,374人]

資料提供：大分車いすマラソン大会事務局

図1 参加者数の推移

表1 第27回(2007)大会実施要項(抜粋)

目的	この大会は、日本国内及び外国・地域の身体に障がいのある方が車いすによるマラソンを通じて、希望と勇気をもって社会に参加する意欲を喚起するとともに、広く県民が身体に障がいのある方についての関心と理解を深めることを目的とする。
名称	第27回大分国際車いすマラソン大会
主催	大分県、国際車いす・切断者スポーツ連盟、財団法人日本障害者スポーツ協会・日本パラリンピック委員会、大分市、大分合同新聞社、社会福祉法人大分県社会福祉協議会、財団法人自治総合センター、大分県障がい者体育協会
主管	大分陸上競技協会
後援	外務省、厚生労働省、日本身体障害者陸上競技連盟、大分県教育委員会、大分市教育委員会、財団法人大分県体育協会、社団法人大分県身体障害者福祉協会、社会福祉法人大分合同福祉事業団、財団法人中村裕記念身体障害者福祉財団、社会福祉法人大分県共同募金会、社団法人大分県理学療法士協会、NHK大分放送局、株式会社大分放送、株式会社テレビ大分、OAB大分朝日放送、株式会社エフエム大分、九州旅客鉄道株式会社
協賛	オムロン株式会社、ソニー株式会社、本田技研工業株式会社、三菱商事株式会社、株式会社デンソー、株式会社本田技術研究所、株式会社大分銀行、南九州コカ・コーラボトリング株式会社、株式会社富士通エフサス、九州石油株式会社、株式会社トキハ、株式会社九電工、大分みらい信用金庫、株式会社ジョイフル、キヤノン株式会社、富士通株式会社、株式会社フォーリーフジャパン、株式会社アソウ・ヒューマニーセンター
協力	大分県警察本部、陸上自衛隊第41普通科連隊、社会福祉法人太陽の家、大分市交通指導員会、日本赤十字社大分県支部、国立大学法人大分大学、医療法人社団恵愛会大分中村病院、大分県障害者スポーツ指導者協議会、KLMオランダ航空会社、株式会社日本航空、全日本空輸株式会社
大会事務局	大会事務局は、大分県福祉保健部障害福祉課内、大分県障害者体育協会に置く。 大分国際車いすマラソン大会事務局 kurumaisu-marathon@pref.oita.lg.jp 大分国際車いすマラソン大会 http://www.kurumaisu-marathon.com/

て共感を得てきた。大会のマネジメントには、行政である大分県を中心とした大会実行委員会と関係組織、地元団体や学校、さらには協賛企業などからのボランティアによる運営が行われている。国内の障がい者スポーツの知名度は依然低いが大分県は国際的に名の知れたスポーツイベントである。

(2) イベント組織体制とイベント運営

本イベントは、大分県と大分市、国際車いす・切断者スポーツ連盟(IWAS)、日本障害者スポーツ協会(JSAD)、日本パラリンピック委員会(JPC)と国・県内外の主要スポーツ、福祉関連および地元新聞の8団体が主催となり、大分県福祉保健部障害福祉課内の大分県障がい者体育協会・車いすマラソン大会事務局にて所掌されている。後援に

は、外務省、厚労省をはじめ福祉団体やメディア関連の17団体、さらに大会開催趣旨に賛同する18企業が協賛し、スポンサーとしての経済的支援、さらにはCSR活動**の一環として『人・もの・カネ、情報』などさまざまな協力と支援でイベントを支えている。

大会運営費(第26回(2006)実績)では、約7,000万円弱が計上されている。この運営費のうち主催である大分県がおおよそ1/3にあたる2,500万円を支出した。これら運営費には地方自治の振興及び住民福祉の増進に寄与することを目的とした(財)自治総合センターのイベント共催事業の補助も含まれている。その他、共催の大分市、大分合同新聞社からの分担金と、協賛各企業からは、協賛金(50万円以上/社)や寄付金等の財源をもって大会が開催されている。

**CSR：企業の社会的責任(Corporate Social Responsibility)は、行政、民間、非営利団体のみならず、企業も社会や環境などの持続可能な社会を目指すために、責任を持つべきであるという考えのもとに成立した概念。

表2 第27回（2007）大会実施要項（抜粋）・続

日 時	平成19年10月28日（日） マラソン：11時00分スタート、ハーフマラソン：11時03分スタート
コース及び種目	大分市内、マラソン（42.195km）、ハーフマラソン（21.0975km）
参加資格	(1) マラソン参加選手にあっては、以下の者とする。 国内選手については、身体障害者手帳を所持する車いす使用者、かつ日本身体障害者陸上競技連盟に登録した者で、主催者が認定した者とする。 外国・地域選手については各国の国際車いす・切断者スポーツ連盟に加盟した車いす競技連盟、またはそれに該当する団体に登録した者で、主催者が認定した者とする。 (2) ハーフマラソンにあっては以下の者とする。 国内選手については、身体障害者手帳を所持する車いす使用者で、主催者が認定した者とする。 外国・地域選手にあっては、車いす使用者で主催者が認定した者とする。 (3) 上記については、平成19年10月28日現在、満16歳以上の者とする。
競技規則	国際車いす・切断者スポーツ連盟競技規則（2006-2007）、平成19年度日本身体障害者陸上競技連盟競技規則及び別に定める本大会競技規則による。
クラス分け	マラソン、ハーフマラソンとも3クラスに分ける。クラス分けが必要な選手については、受付において判定する。
ドーピング検査	世界アンチドーピング機構（WADA）の規程に準じてドーピング検査を実施する。
表 彰	表彰は、マラソン・ハーフマラソンともクラス別・男女別に1位から3位までとする。
申込方法	参加申込書に必要事項を明記し、写真2枚を添付のうえ、平成18年8月25日（金）までに大会事務局あて送付すること（当日消印有効）。
コース下見	平成18年10月28日（土）11時00分から、大分城址公園からバスで行う。
受付、クラス分け	平成19年10月27日（土）12時00分から15時30分まで、大分県庁舎1階で行う。
開会式	平成19年10月27日（土）16時00分から、ガレリア竹町ドーム広場で行う。
交歓の夕べ	平成19年10月27日（土）開会式・パレードに引き続き若草公園において行う。
スタート	平成19年10月28日（日）11時00分、大分県庁前で行う（ハーフマラソンは11時03分）。
閉会式	平成19年10月28日（日）14時20分から大分市営陸上競技場で行う。
競技中の事故	競技中に事故が発生した場合には、応急の処置については主催者において実施するが、治療費は原則として選手の負担とする（健康保険証持参のこと）。また、傷害保険の加入については、主催者において行う。
雨天時の取扱い	雨天時においても原則として競技を実施する。
健康管理	出走における健康管理については、自己責任とする。



図2 スポンサー企業（第27回（2007）大会）

3. 大分車いすマラソン大会のマーケティング・ミックス

(1) 出場カテゴリーとプログラムの変遷

1981年の開催当初「車いすのみ」のマラソン国際大会は、国内でも類をみないイベントであった。そのため第2回（1982）大会までは安全性を考慮して「ハーフマラソン」のみの開催となった。第

3回（1983）大会からは、フルマラソン（42.195km）との二部門となり、国際ストックマンデビル車椅子競技連盟（IWASの前身）公認大会として記録が公認されるようになった。以後、スイスのシェンコンマラソンや韓国のテグ・マラソンなど車いすマラソン単独のレースも開催されるようになり、障がいの程度によるクラス分けは国際ルール

表3 大会トピックス（公式HPより抜粋）

大会	大会・競技関連トピックス（抜粋）
第1回（1981）	・国際障害者年記念事業として世界初の車いすだけの国際大会（ハーフマラソン）
第2回（1982）	・ハーフのみ
第3回（1983）	・ハーフマラソンとフルマラソンの二部門開催 ・国際ストックマンデビル車椅子競技連盟公認大会
第4回（1984）	・2時間の壁を破る1時間48分25秒（公認世界最高記録）で優勝
第5回（1985）	・皇太子殿下・同妃殿下（現天皇・皇后両陛下）御臨席
第7回（1987）	・フルマラソンにも障害の程度に応じて4クラス分けに
第8回（1988）	・参加年齢を16歳に引き下げ
第9回（1989）	・他の国際大会同様の5クラス分け採用
第10回（1990）	・大会連続出場者および功労賞表彰 ・10回連続出場者表彰（開会式） ・盲人タンDEMサイクリングの実施 ・国際ストック・マンデビル車椅子競技連盟の規則改正に準じ、障害部位によるクラス分けを運動機能中心に再編（5クラス）
第11回（1991）	・全国47都道府県全部から参加
第12回（1992）	・国内選手は最多の43都道府県362名が出場
第14回（1994）	・国際大会同様のクラス分け採用（4クラス） ・3分間の時間差スタート採用（ハーフが11：03にスタート）
第15回（1995）	・大会史上最多の42ヶ国・地域からエントリー
第17回（1997）	・大会ホームページを開設（初のインターネット中継実施）
第18回（1998）	・初のラジオ実況中継実施
第19回（1999）	・従来クラス4としていたCPをクラス2と3とに統合、合計3クラスで実施
第22回（2002）	・交歓の夕べで行っていたクラス別表彰を閉会式で実施
第23回（2003）	・生活用車いすへの速やかな乗換えを行い、閉会式はアンツーカー部分のみを使用して実施 ・参加賞として、バスタオルを配布 ・キッズボランティアが陸上競技場フィールド内で通訳ボランティアの手伝い
第24回（2004）	・開会式を一新。ガレリア竹町100周年とタイアップし、ドーム広場で開催 ・総合表彰を廃止し開会式後に商店街をパレード。若草公園で市民交流イベントを開催 ・クラス呼称を変更（クラス1→T51、クラス2→T52、クラス3→T53/54）し、クラス別のレースを前面に打ち出す。 ・ハーフマラソンの選手招待を廃止 ・コース下見のバス乗降介助を陸上自衛隊から大分商業高校のボランティアに変更 ・参加賞はスポーツタオルとし健康診査会場で配付
第25回（2005）	・マラソン参加選手に日本身障陸連への登録を義務づけ。ハーフマラソンは登録不要。 ・T53 / 54男子（マラソン・ハーフマラソンとも）の表彰を10位までから3位までに変更
第26回（2006）	・（株）ジョイフルがキリンビール（株）と提携し全国のジョイフル店内で麒麟淡麗<生>のデザイン缶を発売（9月上旬～大会直前） ・ジョイフル店内のドリンクチケットにも大会デザインチケットを配付 ・日本陸上競技連盟確認計測でマラソンコースが179m長いことが判明 ・マラソンにおいてIWAS公認のクラス分けを実施 ・第11回ふるさとイベント大賞選考委員特別賞を受賞

に準じて改訂され、その程度によりT51、T52、そして比較的軽いT53/54の3クラスで実施されている。

イベントへの参加資格は、16歳以上の身体障害者手帳を所持する車いす使用者である。フルマラソンでは、国際機関（IWAS）公認大会として「競技性」を重視するため、各国IWAS加盟団体（またはそれに準ずる団体）の、また国内選手においては第25回大会より日本身体障害者陸上競技連盟に登録した選手が条件となっている。他方、ハーフマラソンの部は、より多くの選手が出場できる参加重視で、クラス分け審査さえクリアすればよい。なお大会側は自己タイム（直近の2年間）の提出を求めているが、これはスタート時の事故（早い選手が後方からスタートすると前方の遅い選手に接触する）を防ぐため、自己記録がない選手も毎年10名前後参加している。

このように本イベントは障がい者のリハビリとしてのスポーツではなく、チャレンジスポーツ（普及）とチャンピオンスポーツ（競技）としての両輪を兼ね備えたプログラムを特徴としている。

(2) 大会参加促進と工夫、運営の整備・充実のための方策

ここ数年障がい者スポーツイベントが多く開催されるようになったとはいえ、車いすマラソン競技者数は未だ少ないのが実状である。障がい者のスポーツ参加には、障がい者自身の抱える問題と社会の目に見える、また目には見えない障壁（バリア）によって阻まれている実情があることは否めない。本イベントは、これら課題の一つひとつ丁寧に解消し、競技志向のリピーターが多いイベントとして不動の地位にある。第10回の記念大会には外国人選手の参加も多く過去最高の410名を数えた。第24回大会からはハーフの選手招待を中止したためか、300名前後となっている。競技色を前面に出し27回の実績をもつ本大会は、試行錯誤を繰り返しながらも障がい者の『アスリート・ファースト』を念頭においた参加選手への配慮は手厚い。

1) 参加選手の費用負担とサポート

県が主催する国際障害者年記念イベントとしての経緯もあり、選手のイベント参加費は「無料」を維持している。また選手の快適な旅行を支援するため希望者には大分空港から宿泊先までの歓送迎が用意されている。さらに海外の参加選手には通訳ボランティアらによって大会期間中の日常生活がサポートされる。また経済的負担を軽減するために宿泊費（上限あり。重度障がい選手は付き添い1名分）と交通（移動）費の補助も用意されるなど主催側が可能な限りの配慮がなされる。また開会式が開催される前日とイベント当日には昼食（軽食弁当）が支給され、ホスピタリティあふれるもてなしと競技以外の参加選手の経済的、精神（心理）的負担軽減が図られる。ちなみに大会運営費全体に占める参加選手への補助経費負担割合は概ね総支出額の1/4程度である。

2) 会場の利便性とコースセッティング

参加選手にとって宿泊施設や会場、トイレなどへの利便性、さらにはペース配分など考える上でコースなど会場周辺・競技環境はとても重要な要素である。障がいをもった選手には、ちょっとした段差が障壁（バリア）となるためおさらのことさらである。大会の競技のスタートは大分県庁前、ゴールは大分市営陸上競技場と市内宿泊先が近距離に設定され利便性はよい。また、市内および会場周辺のバリアフリーマップが作成され、身障者用駐車場やスロープ、障がい者用トイレ、車いす貸し出し、車いす対応エスカレータ等、ホテルや施設情報を詳述したものが提供され、イベント開催が現地のバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化にも影響を与えている。

競技コースは、大きな橋などの上りと下りとへアピンカーブがあり選手泣かせの感もあるが『大分を制するものは世界を制す』と評されるコースである。走行コースの安全性には大会事務局をはじめとし地域ボランティアによる路面凹凸の修繕やチェックにより走行に影響を与えかねない小石、ゴミなどの除去が施されるなど、細心最大の

注意と配慮が払われる。イベント前日にはバスによるコース下見（任意）も実施される。

3) イベントプログラムの改善

イベント期間中は、選手の受け入れからはじまり開閉会式、県民・市民との交流会等が開催され街中が歓迎・懇親ムードに染まる。これらセレモニーや付加的なプログラムは、参加選手と大会関係者、開催地住民のいずれにとってとてもよい関係を保つように配慮されてきた。一方、参加選手にとってこれら歓迎プログラムは心地よい企画でありながら、競技前の緊張や長時間の移動、競技による疲れが身体的・精神的負担をともなっている。このようなことから第25回（2005）大会以後、会場変更を契機に選手の心理的・身体的負担が少なくなかつ限られた時間内で多くの交流が図れるよう、開会式後の繁華街パレードや歓談中心のウェルカムパーティに内容の見直しを図った。パーティでは、幼稚園からのプレゼントや選手による餅まき（景品券・お菓子など）、音楽演奏などリラックした雰囲気の中で交流が図られるよう演出にも配慮と工夫がみられる。他にも、第1回大会から大会前日に実施されてきた健康審査（メディカルチェックと体力測定）を第25回（2005）大会以後廃止された。

4) 参加者の維持・獲得を狙う広報活動（メディアへの露出など）

今日の障がい者スポーツは、1998年長野パラリンピック以後、スポーツニュースや新聞などのメディアでしばしば取りあげられるようになってきた。しかし、国内で単独の障がい者スポーツイベントがメディアに取り上げられることは今日においてさえ希といっても過言ではない。このような状況の中、大分車いすマラソン大会は、開催当初から広報活動には地元有力新聞社との連携がありイベント情報の提供がなされる。広報先の対象には主としてメインスポンサーである県民への理解をえるため「車いすマラソン」とその魅力を知ってもらうことが必要となる。そのため世界トップ

レベル選手の招聘（大会関係機関と協議し選出する）とともに、「車いすマラソン」を理解するためのパンフレットやちらし等の活字による広報はもちろんのこと、第17回（1997）大会より、より多くの人に生の魅力を伝えるべくインターネットでの中継を開始した。翌年（1998）にはラジオの実況生中継が、さらに2004年には地元民放（OAB）テレビによる録画中継が配信されている。インターネットのHPによる広報は充実しており、大会の概要はもちろんのこと第一回大会からのビデオクリップ、記録等が一覧できる。

（大分国際車いすマラソン大会 <http://www.kurumaisu-marathon.com/index.html>）。

4. 大分車いすマラソン大会の活性化

(1) 大会関連団体との関係

このイベントには、スポーツ、障がい者、福祉、地域、企業、行政分野のそれぞれの異業種別団体がそれぞれのミッション遂行のための協力と連携がある。イベント企画段階当時、地元で開催される別府大分マラソンで、車いすランナーが一般ランナーと共に走ることを計画し日本体育協会と大分陸上競技協会に参加を申し込んだが、陸連への会員登録が参加資格であること、また「足で走る」ことが規則となっていることから共同開催は困難との回答で実現しなかった経緯があった。しかし車いすマラソンを別イベントとして開催するなら協力するという約束をとりつけ、マラソン競技運営のノウハウをもつ陸連が審判員の養成や実際の競技補助、また警察との連携役となって、競技がスムーズに運営されてきたという。第25回（2005）の参加選手は日本身体障害者陸上競技連盟（JAAFD）への登録を義務づけることとなり更なる関係構築が図られている（ハーフは登録不要）。また障がいをもつ人に特有な事項や情報は障害者スポーツ指導員協議会の指導員らによる積極的なバックアップもある。

またイベント運営には資金が必要となるが、大手電子器機メーカーのオムロンやソニー、外食産業のジョイフルをはじめとした毎回数十社が協賛

企業として資金的に支援している。これら協賛企業には6つの特典が用意されている。(1) 大会関係印刷物に社名または商標の印刷、(2) 大会公式プログラムに企業広告の掲載、(3) 大会PR用の広告塔・横断幕等に社名または商標の掲示、(4) 大会当日、競技フィニッシュ地点の陸上競技場に社名を横断幕で広告、(5) 大会公式ホームページに社名または商標の掲示とリンク、(6) 大会名称・大会シンボルマーク・大会マスコットマーク、事務局が管理する動画・静止画の使用、などである。第26回大会(2006)では、大分で創業(1979)した協賛企業の一つ(株)ジョイフルが、キリンビール(株)と提携し、全国のジョイフル店内で麒麟淡麗<生>の大会デザイン缶を発売(9月上旬~大会直前)し、併せてジョイフル店内のドリンクチケットも大会のデザインチケットとして配付するなど、一般の人びとに広く周知企業と大会イメージアップが図られている。これら協賛企業の支援は資金的な援助にとどまらず、各企業社員らによって大会運営を補助するボランティア活動にも広がっている。企業ボランティアの活動は、フィランソロフィー(philanthropy)元年と称された1990年前後に始まり、年々増え続け、今では400人を超えるサポートがあるという。まさに会社ぐるみの支援となっている。このように大分車いすマラソン大会には、スポーツ、マラソン、福祉、障がい者、車いす、そして大分をキーワードとした多くの組織とのネットワークを構築するための強みがある。

(2) 大会運営を支える人材の養成と定着 —効果的なボランティアマネジメントの方策—

障がい者スポーツのボランティアには、障がいのある人と一緒にスポーツをともに楽しむ「クラブ・団体ボランティア」と競技会開催の運営・介助等の支援を行う「イベント・ボランティア」に大別される。本イベントでは、演奏やバトンフラワーズなどの式典業務、また競技審判、交通整理、安全管理、医務、輸送等の競技運営業務、さらにイベント期間中の通訳、介助とした生活支援業務

など専門的な技術・技能を有する業務は、県陸上競技協会や警察、学校等の団体に依頼している。また比較的簡易な一般業務は第10回(1990)大会くらいまでは県・市職員が補助員として対応してきた経緯があったが、回を重ねるごとに協賛企業の社員が中心となったボランティア・グループが自発的にイベント業務を補助するようになったという。今日では、このイベント活動支援団体は、定着し年中行事とした活動になっているという。



写真1 競技スタート前



写真2 イベントボランティア(企業)



写真3 会場での応援

そのためボランティアの一般公募はなされていない。協賛企業のボランティアは、社員による自発的なCSR活動一環としてその家族にも参加している。企業名の入ったジャンパーやTシャツを羽織ったボランティアらが、コース整備や安全管理、事故防止などの競技運営に自発的にあたり、今では重要な役割を担っている。第21回(2001)大会では71団体3,035人(事務局把握数)ものボランティアスタッフが活躍した。

この大会のボランティアマネジメントには、事務局と団体の代表者とおした効率的な連携と協働が図られる。まず大会開催半年前に協力依頼と参加可能人数の照会を企業や学校の各団体代表者に行い、綿密な情報を交換しながら大会1ヶ月前までに業務確定の作業を行う。各団体代表者には、担当業務(支援内容)の周知を図る詳細な運営要領(マニュアル冊子)が配布され事前説明が実施される。これまで活動参加した企業や学校にはおおむね前年度(前回)大会と同様の業務が割り振られることが多く、団体には活動ノウハウの蓄積があり、状況に応じて臨機応変かつ適切な対応が図られているという。長年にわたり活動参加を続けてきたベテランボランティアの存在は大会事務局の負担を助け、その信頼も厚い。

通訳ボランティアのグループである「Can-do(キャン・ドゥ)」は、第1回大会からこの国際大会を支えるために組織された。通訳ボランティアは、外国人選手が大分入りしてから大会期間中のサポートを全面に引き受けるため拘束される時間は長い。外国人選手にとっては非常に心強いサポートで、この大会での良縁をきっかけに選手とボランティアがめでたくゴールインしたカップルもあるという。また市内の老人クラブ連合会では選手が小石につまずいて転倒し負傷したことを知り、大会前にコースと周辺の地域清掃活動に取り組むようになった。イベント当日の沿道では、市内小学生ブラスバンドや太鼓演奏で選手を盛り上げるなど、さまざまな形で選手を支援しイベントに参加する活動がみられる。

5. イベントの効果 一人とひとの心をつなぐ障がい者スポーツイベント

本イベントは観客動員数20万人(2006)とも言われる。車いすマラソン大会は、ともすればモノ珍しい、一部の障がい者のリハビリの運動とするようなイメージをもつ人も未だ少なくない。身体にハンディキャップのある選手がレース用の車いすを使用して時速30km前後で走る競技の迫力は人々の心を打つ。沿道からは選手の奮闘に「がんばれ!」、「がんばって〜!」という自然に発せられ途切れなく続く。選手らもマラソンコースからの声援に後押しされさらなる奮闘を続ける。選手と観戦者、ボランティア、大会運営スタッフのそれぞれが大会参加を通して互いに多くの感動と勇気を得る仕組みがあり、一体となったひとの輪の連鎖がここにはある。

大分国際車いすマラソン大会が四半世紀にわたり大分の街で開催され、地域に根ざした大会として実施されてきた。2006年には財団法人地域活性化センターが主催する「第11回ふるさとイベント大賞」において全国211の応募イベントの中からイベント大賞選考委員特別賞を受賞している。

この大分国際車いすマラソン大会は、単なる障がい者のスポーツイベントにとどまらず、イベントマネジメントをとおして参加した人々全員に福祉マインド、ひいてはユニバーサルマインドの醸成に成果を挙げている、真に日本を代表する国際的スポーツイベントといえよう。

※「障がい」の表記について：本稿執筆にあたり、大会事務局を有する大分県障がい者体育協会が、選手の障「害」者とする表記上の精神的負担に配慮し、2007年3月に「障がい者」とのひらがな表記に変更している。このため本稿も「障がい」と表記することにした。

参考文献・資料

日本障害者スポーツ協会：<http://www.jsad.or.jp/reports/07/07oita.htm>
緒方甫監修(2004)、車いすマラソンー大分から

世界へのメッセージ，中村太郎編集、医療文化社。

大分国際車いすマラソン大会：

<http://www.kurumaisu-marathon.com/index.html>

山口泰雄（1996），大分国際車いすマラソン大会、生涯スポーツとイベントの社会学－スポーツによるまちおこし－，pp.132-140、創文企画。

四ッ谷年晴（2002），障害者スポーツにおけるボランティア～大分国際車いすマラソン大会を事例として～，体育の科学，vol.52（4），pp.304-308。

【調査協力】

大分県障害福祉課

大分県障がい者体育協会

大分国際車いすマラソン大会実行委員会事務局

Marketing of the Sports Event for the Disabled

:Management of the Oita International Wheelchair Marathon

Koji MATSUMOTO

Abstract

The purpose of this paper is to examine the how to manage the sports event for the disabled. I pay attention to the management strategy of the the Oita International Wheelchair Marathon in this time. Data were obtained through interview to executive staffs of the event and relative documents. This report referred to event organization, program, promotion and human resources.